縮小社会という用語

小川正嗣　　2015.9.22

縮小社会研究会（以下、当会）の独自の用語として、「縮小社会」という用語がある。これがどのような意味を持つのかは話者の文脈によって理解される部分が多く、必ずしも明瞭ではない。では「縮小社会」という用語はどのような射程を持つ概念なのか。これを考えるために類型化を提案したい。実際の議論の現場での用語の使われ方から考えて、以下の類型では、A・状況的類型、B・時間的類型、C・地域的類型の３通りを用意した。

A・状況的類型

その１　戦争縮小社会

当会が最も恐れる縮小社会像である。資源と食糧の枯渇により各地で戦争や暴動が起き、人類全体を巻き込みながら、暴力により社会が縮小していく悲惨な有様をイメージさせる。この戦争縮小社会を避けるために当会は研究会を開き議論していると筆者は認識している。

その２　成熟縮小社会

当会が理想とする縮小社会像である。人類の協調により、資源使用量の削減が世界規模で起こる。食糧や物資は少なくとも公平感を損なわないように配分され、力による暴力がない理性的な市民社会が各地に築かれる。当会ではこの理想がどのように実現できるか追及している。

その３　中間縮小社会

上記その１とその２の中間の縮小社会像である。中間とは言っても、実際にはどちらかの割合が大きくなることが予想される。どこかの地域で戦争がある一方で、資源使用量削減の努力も行われる社会である。恐らくは一番現実にマッチしていると思われる。ちなみに２０１５年現在の筆者の予想は戦争縮小社会の割合が大きい。

B・時間的類型

その１　縮小完了社会

社会の姿が停滞している状態である。shrinked society と英訳される。停滞とは何かはここで議論しない。

その２　縮小途上社会

社会の姿が移行しつつある状態である。shrinking society と英訳される。移行とは何かはここでは議論しない。

C・地域的類型

その１　広域縮小社会

広い範囲を念頭に置いた縮小社会である。例えば筆者のイメージには地球全体がある。話者により範囲が異なる点に注意すべきである。

その２　自地域（狭域）縮小社会

狭い範囲を念頭に置いた縮小社会である。例えばる筆者のイメージには日本がある。話者により範囲が異なる点に注意すべきである。

上記の A・B・C の内、最も重要な類型は、A の状況的類型だと考えられる。筆者が実際の議論を聞いていると、他の類型は想定していなくても状況的類型は想定している場合が多く感じられるからである。従って「縮小社会」という用語を使う場合、多くの話者はこの A、B、C の３通りの類型の中から A の類型とその他のどれかのイメージを選択して、あるいは選択しないで話をしていると考えられる。例を２つ挙げる。

例１「成熟・完了・広域縮小社会」

例２「戦争縮小社会」

ここまで見てきたように「縮小社会」という用語は多様な意味を含む。A と C の類型は多様な意味を含みつつもある程度使いやすいものだと筆者には思われるが、B の時間的類型をより明瞭にするためには議論が必要だと考えられる。何故なら世の中は常に動き変化するものであって、どのような状態が移行期でどのような状態が完了期なのか特定する必要があるからである。

例えばエネルギーで移行期と完了期を区分する場合を考えてみよう。現在の世界は化石燃料文明と言っても過言ではないが、人類全体が消費する年間のエネルギーの内、化石燃料をエネルギーとして使う割合が何割以下になれば移行期、または完了期と言えるのだろうか。容易にこのような疑問が湧く。

この点を今後の課題として考えつつ、本稿を終わりにしたい。